

聖ジャンヌ・ドゥ・レストナックにおける アイデンティティの発見

— 挫折の中で見出された修道会創立者への召命¹ —

小林 宏子

本論は、聖マリア修道女会創立400周年に当たり、修道会創立に到る聖ジャンヌ・ドゥ・レストナックの体験を、挫折の中で見出されたアイデンティティという観点から論述し、アイデンティティ確立の課題に直面する学生達に、模範と励ましを提示する試みである。ジャンヌは、世間からは理想の道の挫折と評価される、観想修道会からの退会という体験の中で、神から新しい修道会創立への招きを受け取り、その実現へと踏み出して行く。この新しいアイデンティティの受諾と実現のためには、以前の理想像としての自己を放棄する必要があった。彼女に、この自己放棄を果たさせ、新しい可能性へと開く勇気を与えたのは、イエスの生き方を理想とし、そのイエスを自己のアイデンティティの原型として受け取る信仰であり、イエスに一致して神が示す招きを果たそうとする愛である。このジャンヌの経験は、挫折の中から、新たな道を見出すキリスト教信仰の力強い模範である。

1. はじめに

聖ジャンヌ・ドゥ・レストナック (Jeanne de Lestonnac) とは1556年生まれのフランス人で、1607年に筆者が所属する聖マリア修道女会を創立した人物である。今年、創立400周年に当たり、筆者は、彼女の生涯や霊的遺産について改めて考察する機会を得た。一方、『聖人崇拜』という本の中の「聖人たちの信仰の証しと働きが数世紀を経て持続する一つの道は、彼らの人格、彼らの人生におけるキリスト教的完徳の道と教えが、他の人々をその模範に従うように勇気づけてきたからである。」²という言葉を見つけ、本会が歴史の流れを乗り越えて今日を迎えている意義を確認する思いであった。そこで、本会創立者の経験を、挫折の中で見出されるアイデンティティという観点から考察し、現代、自分探しの歩みの中で困難や

-
1. 鈴木宣明著「召命」『新カトリック大事典』上智学院新カトリック大事典編纂委員会編3巻(2002年、研究社)289頁参照。「召命という語は漢和・国語辞典にはなく、和訳辞典に造語の形でみられる。召命は広義において人生における一定の職業・身分、任務・使命を指し、これらによって各人がこの世において聖性へと神に呼ばれていること、また、生路選定としての職業が神の命じる意志と一致し、自己の永遠の救いを求める人生課題の実現であるとする人間の認識をいう。すべての職業は神からの召命、いわゆる天職であるが、狭義の召命は司祭職、および修道生活への招きをいう」。
 2. L.S.カニンガム著/高柳俊一訳『コンパクト・ヒストリー 聖人崇拜』(2007、教文館)142頁。

行き詰まりを抱えている若者達に、自己形成に伴う葛藤や苦悩と向き合う一助となることを願い、論述を試みる次第である。

ただし、筆者はアイデンティティという用語を、人間一人ひとりが神から委ねられる使命としての召命を生きる真の自己と理解しているため、キリスト教信仰を前提として論を進めることをお許し願いたい。

考察の方法としては、まず初めにジャンヌの生涯を概観し、そのアイデンティティの実現を準備した諸要素について考察する。次に、ジャンヌの‘挫折’体験について考察し、アイデンティティ発見の鍵となる霊的態度に焦点を当てる。論述の根拠は主に、キリスト教の人間観、特に、パウロ及びその後継者達の神学に基づいたものであるが、できる限り現代の若者への励ましとなる模範を提示するよう努めたい。

2. ジャンヌ・ドゥ・レストナックの生涯³

カトリック教会は1949年5月15日、ジャンヌ・ドゥ・レストナックを聖人の位に上げ、その生涯を、尊敬すべき娘、信仰深い忠実な妻、優しく献身的な母、慈愛あふれる未亡人、そして完全な修道女であったと表現し、人生のあらゆる段階にある人々、特に女性達の模範となる人物であることを宣言した。⁴ まず、その生涯を概観する。

2. 1. 社会背景：支配体制と信仰における危機の時代

ジャンヌ・ドゥ・レストナックは、1556年フランスのボルドーで生まれた。父はボルドー市議会参議官のリシャール・ドゥ・レストナック、母は、『エッセー』の著者として有名な哲学者ミシェル・ドゥ・モンテーニュの妹であるジャンヌ・ディケム・ドゥ・モンテーニュであった。社会はカルヴァン派（フランスではユグノー派と呼ばれた）の宗教改革運動による変動の時期であった。特に、北欧や英国との貿易によって繁栄していたボルドーでは、商業資本によって実力を培った新興市民階級が人文主義やカルヴィニズムを歓迎し、暴動や反乱

3. 以下は既に聖マリア修道女会内で発行、又は、印刷されている諸文書を参考にして、筆者がまとめたものである。その主なものを挙げる。

- ① 福嶋瑞江訳/聖マリア修道女会監修『聖マリア修道女会創立史』（1994年、中央出版社）。
 - ② 羽場勝子著「ジャンヌ・ド・レストナックと女子教育」『上智短期大学紀要』、1987年。
 - ③ 羽場勝子「教育修道女会の起源と女子教育—17世紀フランスにおけるカトリック女子教育の発展—」、1991年、日本カトリック教育学会研究発表原稿。
 - ④ ロナルド・ブルプレ著/土屋千枝子O.D.N.訳『愛と信仰—聖ジャンヌ・ド・レストナックの生涯—』
 - ⑤ フランソワズ・スリラヴェルニO.D.N.著/土屋千枝子O.D.N.訳『畏は破られた（詩編124）—聖ジャンヌ・ド・レストナックと共に歩む真の自由への道—』。
 - ⑥ ピラルル・フォス・イ・フォスO.D.N.著/土屋千枝子O.D.N.訳『聖マリア修道女会歴史古文書1607-1921』1990年。
 - ⑦ 土屋千枝子O.D.N.訳/聖ジャンヌ・ドゥ・レストナック帰天350年祭・聖マリア修道女会国際編集委員会発行『聖ジャンヌ・ドゥ・レストナックと聖マリア修道女会』1990年。
4. 前掲『愛と信仰—聖ジャンヌ・ド・レストナックの生涯—』「はじめに」の頁参照。

をもってカトリック教会を背景とする封建制度への抗争を繰り返していた。この新・旧二つの宗教思想の衝突は、ジャンヌの家族内にも及んでいた。父リシャールと伯父ミシェルは、ジャンヌにカトリックの洗礼を受けさせてカトリック教徒として育てるが、母と伯母達は早くからユグノー派に改宗しており、娘のジャンヌにもユグノー派の教理に従った教育を施そうとしていた。当時、社会には女子のための学校はまだ存在せず、女子教育は家庭内で母親の下に行うのが普通という時代であった。ユグノー派では、女性達に集会で説教することや、直接聖書に親しむ機会も与えたため、その自由進取の活動に魅力を感じる婦人達が続出し、勢力拡大に貢献していた。娘の信仰を変えさせようと考えたジャンヌの母親は、彼女をその集会に連れ出し、婦人達が雄弁に語るカトリック批判や新しい教理を聞かせた。しかし、姪の信仰の危機に気づいた伯父のミシェルは、父リシャールを助けてジャンヌの信仰を保護するだけでなく、自ら、深い洞察に基づいた知的教育を施すことに努めた。また、対話の精神を重んじたミシェルは、ジャンヌにも敵意や対抗心からでなく、理解と調和を求める姿勢によって、真理を追究し、学問を深めるべきことを教えた。

娘としての母への情愛と、神への信仰のはざまにあって、ジャンヌは幼い頃から多くの苦しみや試練を経験した。母に疎まれて悲しい思いをする度に、自室の十字架の前で祈り、カトリックの信仰に留まるための助けを祈り求めた。そのような姉に対し、イエズス会の学校へ通う弟も、自身が学校で学んだ教えを伝えて助けた。彼は姉に、本性からなるべくしてなるものと、意識してならなければならないものを見分けるべきことを教えた。⁵ つまり、「すべての人を、礼拝と愛とに拘束する神は、人間と比べられるものではなく、また、カトリック教会は母であり、この母の懐から、どんな母親も私たちを取り上げることはできないこと」を話した。従って、「自然がもともと彼女を結び付けているものに満足しないで、常に神のみ旨に満足すること、真に正しいことを学ぶこと、更に、人間に選択が任されていることにおいて、神への正しい義務と永遠の生命に与らせる道から引きずり降ろそうとする‘畏’の存在を知り、徹頭徹尾、その誤りから遠ざかるべきこと」⁶ である。

2. 2. カトリック信仰に留まる堅固な意志を養う祈り

1568年にボルドー市に入ったイエズス会士は、翌年からカトリック要理教育を始めている。母親の説得から自らを守るために、ジャンヌはしばしばイエズス会の司祭達の説教を聞きに出かけ、黙想と祈りを愛するようになる。このイエズス会士達による霊的指導は、彼女の信仰をより堅固にし、孤独と内的潜心の価値を悟るための助けとなった。次第に深められる神との親しさの中で、ジャンヌはカトリック教会への尊敬と愛を強め、修道生活への望みを抱くようになる。

5. 前掲『聖マリア修道女会創立史』60頁。

6. 同上60-61頁参照。

1572年のある日、自室の十字架の前で熱心に祈っていると、神の現存を強く感じ、神にすべてを捧げたい望みに満たされる経験をする。すると「気をつけなさい。私の娘よ。私があなたの心に輝かせてきた聖なる火を決して消さないように。私に仕えるように熱心にあなたを動かす火を。」という声が心に聞こえた。⁷ この声は、たとえすぐには修道女になれないとしてもその願いは必ず叶えられるという約束と受け取られ、誘惑や迷いに耐える彼女の心の中であって、どのような時にも神への信頼を保つべきことを促す力となった。

2. 3. 実生活を通して学ぶ現実主義の態度

武器や弾薬を伴って繰り返されるユグノー派との争いは、教会聖堂や祭壇を破壊するだけでなく、市民生活の中に受け継がれていた信心や良い習慣、修道生活に対する愛をも滅ぼしていた。当時、ボルドー周辺に存続していた修道会はわずかで、甚だしく緩んだ規則の下での生活か、逆に極端な厳格さと身体的苦行を保持する様式かの両極端に分かれていた為、父のリシャルはジャンヌに結婚を勧め、ジャンヌも父の勧めに従うことが神の望みであると悟り、1573年17歳になる頃、ボルドー近郊ランディアラスに領地を持つガストン・ド・モンフェラン侯爵と結婚した。24年間の結婚生活で7人の子供を授かったが、2人はごく幼い時に天に召され、長男も若い時に事故で亡くなった。更に41歳の時、突然夫に先立たれ未亡人となると、後継ぎが成人するまではと、領地の管理を引き継ぎ、子供達の教育の完成に努め、領地の運営・管理にも力を発揮した。妻として母として、また、領主夫人としての役割を果たす生活を通して、ジャンヌは、現実の厳しさを知った上で事に対処する現実主義を身につける。しかし、常に神への祈りと慈善の業を忘れることはなく、カトリック信仰に篤い家庭を築いた。

2. 4. 「シトー会の夜」⁸ の啓示と聖マリア修道女会の創立

1603年、ジャンヌが47歳を迎える年、息子が領主の座を受け継ぎ、結婚したため、若い時からの望みを叶えようと、シトー会修道院に入り、祈りと苦業を通して神に仕える生活を始めた。しかし、厳しい修行の結果、体を壊し、医者が退会を勧める容態に陥った。修道院長から退会を告げられた夜、大きな挫折感と苦しみの中で再びジャンヌは祈った。

「……神様、私は、あなたご自身で、ここへお導き下さったこの家を出なければならないのでしょうか。……私が十分に忠実でないために、ここに留まるのにふさわしくないのなら、私は苦行によって、すべてを償うつもりです。……それとも、あなたはこの私に対して何かほかの計画をお持ちなのですか。……またもし私がこの家を出るようなことになるなら、そ

7. 前掲『聖マリア修道女会創立史』65-66頁参照。

8. 同上110-114頁参照。以下は本会の中で、「シトー会の夜」と呼ばれる修道会創立のインスピレーションが与えられた出来事の描写である。

れが決してあなたから離れることになりませんように。……どうぞ、お話し下さい。主よ、あなたの婢女が、あなたのみ言葉を聞いておりますから。』

祈りが終わるや否や、彼女に示された靈感にははっきりとした幻視が伴っていた。彼女は、夥しい数の靈魂が滅びに向かう崖に立っているのを見、とっさに、この混乱した社会の中で魂の滅びに落ちてゆく人々に手を差し伸べるのは自分ではないのかと悟った。同時に神は、使命の具体化を彼女に示した。新しい修道会の創立という考えが彼女の心に刻まれ、会の模範として聖母マリアの徳の偉大さと神秘が示された。そこで、ジャンヌは、神がこの修道会を通して、失われた聖母への崇敬と愛を人々の間に取り戻し、その模範と保護の下で女性の教育に専心する娘達によって、カトリック信仰と修道生活の誉れを回復しようとしていることを悟った。若い時に、神によってジャンヌの心に灯された召命の火は、今、実現の時を迎えたのである。ジャンヌは、神の業は人間の考えとは異なることと、人間の目には挫折と映る出来事の中にこそ、神の霊が働くことを悟った。神の計画を悟ったジャンヌにとって、もはや世間へ戻ることで予想される嘲笑も、全く新しい使命を社会の中で果たそうとする時の困難さも、恐れるものではなくなった。

魂の平安を得て元気を取り戻したジャンヌは、翌日、シトー会を去り、ランディラス近郊の静寂なラ・モテで、祈りと思索のうちに神から示された計画をもっと深く知るために隠遁生活を始めた。しかし、今回の隠遁は、宗教の危機を抱える社会から逃れるためではなく、社会への奉仕に向かうため、また、ふさわしい指導者や同志との出会いを求めて祈るためであった。⁹ 事実、祈りに応えるようにイエズス会司祭と数名の女性達との出会いが与えられ、イエズス会の精神と会則を取り入れた、女子修道会としては新しい様式を備えた聖マリア修道女会創立の手続きが進められた。まず1606年、ボルドー大司教区教区長、スルディス枢機卿の認可を受け、更に、教皇パウロ5世の認可教書を受けて、1607年4月7日、修道会は創立された。学校の評判は他の町へと広がり、1640年にジャンヌが亡くなる時までに、フランス国内に30の学校と修道院が創立されていた。更に、1650年にはスペインのバルセロナに創立され、以後400年の間には、スペイン国内ばかりでなく、中南米各国、アメリカ合衆国、アフリカ大陸、アジア（日本・フィリピン）へも広がり、現代でも必要とされる場所への新しい修道院の創立が続いている。

9. 前掲『聖マリア修道女会創立史』121-122頁参照。

3. ジャンヌの召命を準備した恩恵

3. 1. 外的諸条件としての恩恵と応答に表れる人格的要素

キリスト教における召命の本質は、「神が特別な恩恵をもって人間に呼びかけ、働く、これに対し人間が自由に応えることにある」¹⁰と説明される。教育修道女会の創立者として実現されたジャンヌの召命を回顧的に見る時、その成育環境や人間関係、人生経験といった人間的諸条件は確かに、将来、社会の中で教育修道会を創立するという彼女の第二の召命を準備した神の恩恵¹¹であったことに間違いはない。混乱した社会の中で、父と母の信条の違いがもたらす葛藤の経験さえも、人間的情愛を乗り越えて信仰を守り通すという神に向かう姿勢を養うために役立っている。更に、保護者の父親と共に健全な知的養成や人格形成に貢献したモンテニユの存在や、確固とした教義に基づく霊的指導を与えたイエズス会士達の存在は、思想や信仰の危機の時代を生き抜くために神の恩恵が準備したものである。¹² しかし、これらの恩恵に信仰をもって応答する中で養われた能力や資質だけが、彼女の第二の召命、つまり、新しい修道会の創立者となるアイデンティティを実現させたのではない。むしろ、様々な困難を覚悟の上で、彼女に恵まれた資質を社会の中で生かすよう用いた力の主体は、挫折の中で呼びかけた神の救いの意志である。このような場合の神の意志を実現するために鍵となるのは、人間の努力や業に頼る自由意志が起こす熱心さではなく、むしろ、ただ神の恩恵によって与えられる信仰に基づき、自己の意思さえも放棄して神に従う全幅の信頼と愛である。多くの聖人と呼ばれる人物の人生から回顧的に把握されるアイデンティティとは、歴史の中の具体的な時と場において実現された神の救いの業の個人化された姿ではないだろうか。

3. 2. 観想修道会への召命と挫折

ジャンヌの経験は、キリスト教が教える信仰が、決して平坦な人生を生きるための保証なのではないことを示している。むしろ、信仰の有る無しに拘わらず、人間の人生には苦しみや試練が付きものであることを示す。しかし、歴史を導く神の摂理を信じる者の目は、同様の状況の中に、苦しみを取り除かれることではなく、困難を通過するための援助者や保護者が与えられることに神の配慮を見出す。¹³ このことは、聖書が苦しみを摂理の中の神からの試練として受け取り、しかも、この場合、神が許す試練とは、人間の力量を試すためのものではなく、その愛を人に知らせるためであると説く¹⁴ことに通じる。この世には人間の目に

10. 前掲 鈴木宣明「召命」『新カトリック大事典』3巻289頁。諸説ある中のより正しい説として示されている。

11. 同上290頁。L.S.カニンガム著『聖人崇拜』143-144頁参照。

12. 前掲フランソワズ・スリラヴェルニO.D.N.著『罫は破られた』100頁参照。

13. コリント人への第一の手紙10章13節「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていただきます。」

14. 雨宮慧著『旧約聖書を読み解く』（日本放送出版協会、2006）96頁。

は不条理としか言いようのない出来事が起こり、一人ひとりの人生には、その人に固有の困難や苦しみが存在する。しかし、それらの経験の中に神の助けや指導を見出すことは可能であり、神が人間に期待することは、神の恩恵や配慮を体験させることで信仰の確信を強め、恩恵に信頼し、未知の世界の中で果たすべき使命に向けて、自由な応答としての行動を受諾と委託の態度で開始することである。

ジャンヌの少女期にイエズス会士達はその会の創立者、ロヨラの聖イグナチオによって編み出された『靈操』¹⁵を携えて、ポルドーでの活動を始めていたことの意味は大きい。イエズス会士達による、確かな神学に基づく靈的指導を通して識別された祈りの習慣は、困難の中にも神の計らいがあることを見出す識別の目を準備したものである。「聖なる灯火を消さないように注意なさい」という神の直接の語りかけを受けた時、それが、苦難の終了ではなく、更に続く試練の時を過ごすための支えとなることをジャンヌは理解したであろう。現実の社会生活の中で、キリストに倣って、信仰・希望・愛を実践し奉仕するためには、日常の雑事であれ、人生の転機となるような大きな出来事であれ、生きることに含まれる苦しみを担う積極性と堅固な意志が必要なのである。

そして、社会の中での責任を果たし、それを次の世代に引き継いだ時、ジャンヌは残りの人生を、苦行と祈りによってキリストの十字架上の奉献に与る観想修道生活の中で送るよう召し出されていると感じ、シトー会へ入会する。神から受けた恩恵を意識すればするほど、感謝と愛に溢れたジャンヌの熱意は、彼女自身を捧げるための英雄的な身体的苦業の道へと駆り立てた。しかし、神の摂理は更なる試練を準備していた。ジャンヌは熱心さのあまり重体に陥り退会の勧めを受けることになる。シトー会を退会して社会に戻ることは、彼女にとっては、確信していた召命の道の頓挫であり、それまでの信仰の歩みの完成を前にして実りを失う危機を意味した。このような危機の中で、隠された神の意志を理解するためには、沈黙という祈りの時が必要となる。深い孤独の祈りの中で幻視を伴って示された新しい修道会の創立という第二の召命の啓示は、苦行による奉献の道の挫折という試練が意味することをジャンヌに理解させた。

3. 3. 挫折経験における「真の自己」の自覚

心理学的に召命を見た場合「司祭・修道召命は、現在の自己イメージ（[英] Self-Concept-In-Action）によってではなく、現在の理想の自己イメージ（[英] Ideal-Self-In-Action）から生まれる」¹⁶と説明される。ジャンヌの最初の修道召命が、当時の社会の中で一般的であった宗教的エリート、つまり、‘選ばれた者・精鋭’の像としての修道者

15. 本学の建学精神の源泉はイエズス会の創立者聖イグナチオ・デ・ロヨラの靈性にある。『靈操』イグナチオ・デ・ロヨラ著／門脇佳吉訳・解説（岩波文庫、1995年）37頁解説によれば、『靈操』の目的は、靈操を行う人が自分に対する特別な神の御意志を探し、見出すことである。

16. W.キッペス著「召命の心理学」『新カトリック大事典』3巻（2002年、研究社）291頁参照。

像¹⁷の中に、自己の理想像を重ねる宗教的熱意によって見出された可能性はある。すなわち、神の意志に一致させる「召命への応答」を考える時に、宗教的事柄であっても、神の意志をその時代の一般的概念の枠内で受け取ることがあり得るからである。しかし、「聖書における召命は、神の創造の業とも同一化され、¹⁸ 神の意志に基づき、その意志を実現するための選びである。それゆえに呼びかけを受ける人間の側には、根底からの回心、全く新しい存在の根拠に根差す生き方をする新しい人間になることが求められる。」¹⁹ため、ジャンヌにも神の導きがあったにせよ、社会で評価される理想的自己像を目標にする生き方から、新しい存在の根拠に根差す生き方への回心が必要となったと言える。

修道生活は奉献生活とも呼ばれ、キリストの犠牲に合わせて自己を奉献する生活である。聖書における犠牲の目的の一つは「人が所有するものはすべて、神から授かったものであって、いつかは神に返さねばならないことを思い出すための象徴」²⁰と説明される。したがって、自己を捧げるという修道召命の根本には、「すべては与えられたもの」という認識と表裏一体の「無に過ぎない自己」の自覚が求められる。聖書思想に基づき、キリスト教はこの「無である人間」の自覚を、「神が創造主であり人間は被造物である」とする信仰の真理の一つに据え、この真理に基礎づけられた神の前での人間の態度を「謙遜」という徳として説明する。²¹ ただし、聖書思想やキリスト教霊性が語る謙遜が、日本古来の美德としての「控え目な態度で振舞うこと」「謙ること」（他者をうやまって自分を卑下すること²²）とは大きく異なることに注意する必要がある。日本語の場合は人格概念を意味しているが、キリスト教用語としては、「全」である神の前における人間の「無」の自覚と、その自覚に基づく神との本質的關係を意味する。²³ 従って、神との関係において人間が取るべき態度としての謙遜は、神の御前に身を屈め、その意志に従うことであり、キリスト教はその完成された姿をイエス・キリストの生き方に見出している。つまり、神の子でありながら「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで」（フィリ 2：8）の謙遜と従順によって父なる神の救いの計画を成就したイエスである。しかも、イエスの謙遜は、神への従順ばかりでなく、人間の運命に連帯し同一化するために、自ら進んで苦しみを担う愛の結果であった。

17. 前掲『聖人崇拜』91-92頁、115-116頁参照。「当時、教会権威によって、尊敬され模範としてかかげられるべき人物であると宣言される聖人像には、ある特定の社会学的人物像が反映されていた。つまり、男性は女性を四対一の比率で上まわり、女性の場合は身分の高い貴族、あるいは修道会の長上であった」。

18. イザヤ43：1, 7, 21。

19. 高柳俊一著「聖書における召命」『新カトリック大事典』3巻290頁。

20. ポール・ジョンソン著、石田友雄監修『ユダヤ人の歴史』（1999年、徳間書店）35頁。

21. 伊従信子著「謙遜」『新カトリック大事典』2巻（1998年、研究社）799頁。「謙遜の基礎は、信仰がはっきりと示す真理（すなわち人間が受けたすべての善は創造主、救い主である神の愛を源としており、悪のみが人間からのものであること）を誠実に認めることにある」。

22. 『広辞苑』。『霊操』イグナチオ・デ・ロヨラ著／門脇佳吉訳・解説（岩波文庫、1995年）166頁167番「謙遜の第三段階の解説」参照。

23. 前掲伊従信子「謙遜」参照。

3. 4. 「無」の自覚の上に示されるアイデンティティ

ジャンヌに与えられた最大の恩恵は、この挫折の苦しみの只中で捧げた祈りに応えるように、神が啓示の形によってその意図を示されたことであろう。社会が必要としている新しい修道会を創立するために働くという使命が、ジャンヌの発意や才覚、当意即妙の話し方や快活な性格、的確な判断力や行動力などの資質²⁴に因るものではなく、ただひたすら神の救済意志を主体とする業であり仕事となるために、神がジャンヌに期待したのは、自己の実績となる外面的奉獻ではなく、全く逆の奉獻、すなわち、自己の限界を受容し、十字架上で死ぬイエスの謙遜に倣って神への従順と愛を捧げる心の奉獻であった。「無」である自己の自覚、しかし、神がおられ自分に期待しておられることがあるゆえに、その実現は確実であることを信じる信仰、²⁵ どんな困難があろうともその神の御旨を遂行しようとする愛に動機づけられた活動こそが、神の大きな摂理が準備する一人ひとりのアイデンティティを実現する上では必要である。神の意志を悟ったジャンヌは、自己に与えられた恩恵さえもが、自己を誇り、神の働きを二次的な位置に貶める危険を含んでいることに気づき、人生の中で神から受けた恩恵を、再び神がご自分のものとして自由に用いることができるよう、ただひたすら自己を放棄し、感謝と謙遜な心をもって神の御旨の実現だけを望む回心を果たした。ジャンヌは修道女たちにも、霊的な闘いにおいて重要なことは偉大な功績にあるのではなく、罪深い自己の現実を隠そうとしない堅固な意志にあると語っている。²⁶

「より大いなる謙遜を必要とすること、すなわちキリストへの真実の愛を心の中に持つために、自己と全ての物質的所有と自己愛とを完全に放棄すること」を優先させることは大切です。(H.O.301)²⁷

「神は私達が塵であり、その弱さは生まれつきの特徴であることもよくご存じです。神の正義は、厳しいものですが、自らを神への奉仕に捧げ、神をお喜ばせるためにだけ働いている婦人達のために、それが愛に変えられるというのは真実です」(Julia 113)²⁸

「(外的²⁹) 犠牲はとるに足りません。私は、もっと完全な犠牲を捧げ、自分自身を捨てるように決心すべきです。」(Ste.Marie 396)³⁰

24. 前掲フランソワズ・スリラベヴェニO.D.N.著『畏は破られた』3-4頁。

25. 伊従信子著「謙遜」参照。詩編22：25-27に示される貧しい者の謙遜。マルコ福音書とマタイ福音書が十字架上のイエスの言葉として引用するのは詩編22の冒頭句である。

26. 前掲『畏は破られた』8頁。

27. 同上9頁。

28. 同上8頁。

29. ()内は筆者による加筆。

30. 同上『畏は破られた』8頁。

「徳とは、人の素質や気質の仕事ではなく、神の恩寵の働きに従う霊の仕事です。修道女たちは、徳が自然の気質によるのではなく、むしろ恩寵の動きに対する忠実な承認によることを理解すべきです。本当の熱心は、外に表れた遵守にあるだけでなく、聖霊のひそやかな励ましに従うことにあるのですから。」(H.O.112)³¹

4. ジャンヌのアイデンティティの原型であるイエス・キリスト

4. 1. 新しい人イエス・キリスト

イエス・キリストは「神の国」を宣べ伝え、神の最終・決定的介入による救いの時の訪れを告げた。しかし、その活動は十字架刑という極刑を受ける形で終わる。つまりイエスの外面的活動は完全な挫折に終わったことになる。ところが、イエスの捕縛に際して逃亡したイエスの弟子たちは、イエスの死後、「神はイエスを復活させ主とし、メシアとされた。」³²「イエス・キリストにおいて神の愛が啓示され、信じる者に聖霊が与えられる」³³「神に身を委ねてキリストの死にあずかるなら、キリストの復活にもあずかって新しい命を生きることになる」³⁴「信じる者は洗礼によってキリストと結ばれて、³⁵キリストと一つのからだとなり、³⁶神の子となる」³⁷という使信を携え、公に宣教活動を繰り広げたのである。人間の目に完全な終わりと映る出来事のその先に、なお希望を見出すキリスト教信仰の根拠は、このイエス・キリストの死の上に、神の新しい創造の息吹が注がれ、新しい生命に復活させた出来事の中に存在する。死から復活させられ主とされたイエス・キリストは、人間の救いのために神が新しい創造の業を開始したことを証しする新しい人である。³⁸そこに、ジャンヌのアイデンティティの原型となる、新しい人イエス・キリストのアイデンティティが存在している。

4. 2. 十字架上のイエス・キリストへの一致

この世の不条理や悪に出会うとき、人は普通、「よき神がいるならば、なぜ、この世には悪が存在するのか」と問うであろう。しかし、イエス・キリストは罪を犯さなかったにもか

31. 前掲『畏は破られた』22頁。

32. 使徒言行録2:24、36参照。

33. ヨハネ1:18、使徒言行録2:38、参照。

34. ロマ6:4-5他、Ⅱテモテ2:11参照。

35. ロマ6:3-11。

36. ロマ12:5、Ⅰコリ6:15、12:12、27。

37. ロマ8:14-17、ガラテヤ4:4-7。

38. 高柳俊一著「イエス・キリスト」『新カトリック大事典』1巻325頁参照。使徒パウロは、イエスによる救いが人間全体に関わる事柄であることを明らかにするために、最初のアダムの墮罪によってもたらされた人類の破滅が、最後のアダム＝キリストによって回復されたと述べる(ロマ5:21)。そして、最後のアダム＝キリストは「命を与える霊」(Ⅰコリ15:45)であり、復活によって、地上的・アダム的な人間のなかに神の像(エイコーン)を回復せしめた(コロ3:10、エフェ4:24)と語る。

かわらず十字架上で処刑されるという全くの不条理を引き受けて復活し、「わたしは柔和で謙遜な者だから……わたしに学びなさい」(マタ11:29)と自らをモデルとして示しながら人々を招く。³⁹ ジャンヌはその呼びかけに対し、十字架上のイエス・キリストとの一致を望む愛⁴⁰をもって応える。この愛の応答を可能にするのは、十字架上のイエスの招きが、共に滅んで終わるためではなく新しい人へと甦るためであることを信じる信仰による。しかも、十字架上のイエスは、人間の救いのために人間そのものになりきってその苦しみや痛みを担う神の愛⁴¹の姿であるため、十字架上のイエスへの一致は、その神の愛に應えて、「無」の中に働かれる神の愛との出会い⁴²を信じ、キリストと共に、新たな神の愛の働きを受けた新しい人のアイデンティティへと変えられていくことを望む愛の表現となる。イエス・キリストのアイデンティティへの一致は、具体的な生活の中で、神に対しては、「無」の自覚の上に成り立つ大胆なまでの信頼を持ち、人々に対しては、「人の子は、仕えられるためではなく、仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」(マコ10:45)、または、「ところで主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。」(ヨハ13:14)の言葉に従い、愛の奉仕へと自分を差し出してゆく態度を持つことである。

4. 3. 新しい人イエス・キリストのアイデンティティ

人生の挫折や不条理に遭遇し、人間の根本的無力さと惨めさを自覚させられる時、苦しむ一人ひとりの傍らにいて呼びかける十字架上のイエス・キリストのアイデンティティを思い起こして祈りたいものである。不条理や苦しみが存在することは決して神が存在しないことの証拠ではない。すなわち、最初のアダムが拒んだ「無に過ぎない者」としての自己は、人間の真理の一面に過ぎない。重要なのは、その無である人間が同時に「神の愛によって満たされた無である」⁴³ ことであり、その神との関わりの中にある自己を生きることが、イエス・キリストが死と復活によって回復し、新たにした人間のアイデンティティの本質である。人間の目には挫折と映る出来事の中にこそ、絶望から希望へと転換する道を開く神は存在する。そして、そこで神が人を新たな聖性や職業へと招く呼びかけを聞くことは可能である。むしろ、他者のために自分を差し出すことで新たなアイデンティティを見出すことが多い。ジャンヌのように、キリストと共に建設する、これからの社会が必要としている新しい人の生き方に出会う契機となり得るのである。神の前の「無」を自覚して謙遜になり、ありのままの

39. 前掲伊従信子「謙遜」『新カトリック大事典』2巻799頁参照。

40. 門脇佳吉訳・前掲『霊探』168頁解説には、イグナチオが謙遜の三段階で目指すことは、イエスとの人格的な一体化であると記されている。イグナチオは救いのために必要とされる謙遜や、完徳を理想とする謙遜を更に向上させた段階の謙遜として、イエス・キリストとより一層一体化することの熱願へと霊操者を導こうとしている。

41. 柳田敏洋著、『日常で神とひびく』(2006、ドン・ボスコ社)74頁、89-90頁参照。

42. 同上74頁参照。

43. 同上17頁参照。

自己を差し出すなら、神の力に導かれ新たにされる真の自己というアイデンティティを見出すことだろう。

5. 終りに

若者たちの中には、苦しみがあることはすなわち不幸なのだと考える者がいる。確かに、キリスト教も苦しみ、それ自体に価値があるとは決して考えない。しかし、苦しみを避けようとする人間の本能に従って人生の選択を行うことが正しいとも考えない。むしろ、アイデンティティ発見の歩みのためには、苦しみは苦しみだけで終わるものではなく、別のものに変えられることを知って、受け入れる態度が必要であると考え。人生には、他者との関わりの中にある自分の生き方を考え、自分にとって価値があると信じる目的の一つを選択する勇気と、その道の完成に努める時に当然生じてくる苦しさや厳しさを担う覚悟が必要である。⁴⁴ そのような心構え無しに、その人に固有の人生を実現することは難しい。自分にとって良いことであると知りながら、苦しみへの恐怖のために、或いは、ただ面倒であるという理由で、多くの良い業を止めたり、妥協して逃げるということが起こりがちであり、現代人は苦しみに対して弱くなっていると言われる。⁴⁵ 従って、まず、苦しみや厳しさに対する拒否反応を見直し、その恐怖を癒し、秩序づける必要があるのかもしれない。⁴⁶ そのためにも、神への従順と人間への愛のために苦しみと死を担って復活し、今は「命を与える霊」⁴⁷となっているイエス・キリストのアイデンティティに心を開いて欲しいと願う。ジャンヌのように、自分の道に立ち現れる挫折や失敗という壁を、十字架上のイエス・キリストとの対話の中で見直し、真剣にその意味を探すなら、そこに新しい人への回心を求め、共に歩み始めるよう招くキリストの呼びかけを聞くことができる。イエス・キリストは一人ひとりの友として、そのアイデンティティの完成まで導いてくれるであろう。キリスト教は、一人ひとりの生命の根底には、神の創造と救済の意思が働いており、神は一人ひとりの人生に、固有の使命を与えていると教える。ジャンヌの模範が、アイデンティティを模索する現代の人々に、希望と励ましを与えることを願っている。

44. 森一弘著『神に向かう心 現代霊性の断章』（1982、サンパウロ）25頁参照。

45. イシドロ・リバス著『祈りを深めるために（その4）』（2003、新世社）33-34頁参照。

46. 同上34頁。

47. Iコリ15:45。